

この学校にわたしたち

2024. 3. 1 NO 57

AI 時代に必要な力の育成…

先月初めに89歳で世界的に有名な指揮者の小澤征爾さんが亡くなりました。ボストン交響楽団の音楽監督を29年間務めるなど様々なところで活躍しましたが、多忙な中でも「子どもたちに音楽の喜びを伝えたい…」との思いから子どもの日コンサートを開催するなど音楽教育にも力をいれたそうです。小澤さんの師事したレナード・バーンスタインさんは指揮者として作曲家として、また教育者として活躍し、札幌に音楽家を育てるための音楽祭を立ち上げ、そこでオーケストラを結成したと言われています。両者とも一流の人間は、必ず次の時代を見据え、人材育成に尽力していることに共通点を感じます。そのバーンスタインさんの言葉に「教えるということは教わることもある」というものがあります。

学校教育はこれまで教師は黒板の前に立って児童に内容を“教える”ことのみを重視してきました。最近ではAIの急速な進化により、文章も画像・動画も数秒で出来上がってしまいます。AIは1年で全く予想もしない進化をされると言われています。そんな中を生きていく子どもたちに①自ら学ぼうとする力②他者と協働しながら学ぶ姿③自分の感情をコントロールし、あきらめずに頑張る姿…などいわゆる非認知能力を育てていくことが大切であると言われています。これまで何度も園と小との接続（津市架け橋プログラム）について述べてきましたが、今、この非認知能力を育てるために小学校がいかにか本気となって幼児教育から学び、その考え方を小学校教育に生かしていくかが問われています。私は今年1年、子ども園に通い、園児の様子や保育士の表情・言葉かけや支援を間近で見、園長や保育士とも語りあってき

て大変勉強をさせていただきました。園では園児一人一人の表情から思いや願いを感じ取り、達成感を味わわせるためにどうすればよいかを考えています。まさに「教えるということは教わること」です。小学校も教師はいつまでも教科書の内容を“教える”だけの授業から児童が今「どんなことを学びたいのか」ということからスタートし、自学（一人学び）→協働学習（話し合い）→深化（考えを深める）→発信（アウトプット）というスタイルに変えていかなければなりません。

今年、本校では各教員が津市架け橋プログラムや授業づくり研究を通して他府県の先進学校の視察を行ったり、実践をしたりして取り組みを始めました。この流れは次年度も引き続き、取り組んでいきたいと考えていますので今後ご理解・ご協力を宜しくお願いします。

